

論文審査の結果の要旨

栗原 剛

本論文は、伊藤仁斎の倫理説の核心を成す、「本体」「修為」論の構造を解明する試みである。

仁斎は、人が「由って」行うべき道德(本体)と、努め行うべき道德(修為)とを区別する。この区別をめぐっては、さまざまな先行研究の蓄積がある。論者は、それらをふまえつつ、本体と修為の区別・連関の問題を、修為という具体的実践の質を追究することによって解き明かそうとする。

第一、二章においては、仁斎の「天道」「天命」についての論が分析される。論者は、仁斎の天地人総体の把握が、「窮まりなく生き動くもの」であったと指摘する。生きて動くかぎり、これを朱子学のような静的な理でとらえ切ることが出来ない。そこで、静的な理に代わる根拠として仁斎が見出したのが、「天命」であると論者は考える。そして、天命は、「言語」で「議する」「究める」という形によってではなく、己れの生を尽した者が、「安んずる」という仕方でのみ知ることのできるものであるとされる。

第三～九章では、「生を尽くす」具体的実践(修為)をめぐる仁斎の論が、精密に分析される。論者はまず、仁斎の性善論を詳細に吟味し、彼のいう「性の善」は、身体的な今・ここという小さな端本でしかない(頹落の可能性)ものこそが、価値を実現すべき主体である(当為の要請)という、道德的主体の独特の定位であったことを明らかにする。かかる主体にとってのあるべき営為として仁斎が示すのが、「忠信」「忠恕」という実地の営みと、「読書学文」という観念の営みである。論者の理解によれば、今・ここという小さな主体が、今・ここにいる他者に対し己れを尽くす営みが「忠信」であり、その他者の存在を深く察し、他から反照されてくるものを受けとめ続ける営みが「忠恕」である。忠信・忠恕は、常に相伴う一体的関係にある。その一体において、今・この生の営みは、そのまま、「人」の存在を媒介とした自己の生の自覚ともなっている。この自覚を観念のレベルで裏付けるのが、あらゆる他者を媒介とする自覚の営みたる「読書学文」である。ここにおいて、徳行としての忠信・忠恕と、自覚の確かめとしての読書学文とが相補う関係をなすという、仁斎修為論の内部構造が明らかにされる。

以上を受けて、第十章では、本体と修為が次のような形で関係づけられる。

生き動いている者が、生き動いている天地人の動態それ自体を自覚することが、本体を知ることである。それは、自己の生を尽くし切ることによって可能となる。というのも、日々現実に生を尽くす営みである忠信・忠恕は、今・ここにおける実践であると同時に、そのように生き動いていることの自覚そのものである、という構造を持っているからである。ここから、論者は、本体に「由って」修為を行う、という仁斎のテーゼの意味は、本体の自覚と修為の実践の相即ということにあった、と結論づけるのである。

以上、本論文は、仁斎学の基本構造の分析を通じて、「存在」と「当為」との関係という、倫理学の根本的問題に対する一つの解答を近世日本思想の内に発見したものである。論旨は明快で、細部の分析もきわめて精密であり、また先行研究への目配りもよく行き届いている。

一方で、問題をあまりにはっきりと絞り込もうとした結果、「誠」や「礼」など、関連する諸概念の位置づけに不明な点が残されたこと、また用語を共有する朱子学的思惟との差異が、細部で曖昧になっていることなど、問題点がないわけではない。とはいえ、倫理学の基本的な問題関心に基づきつつ、仁斎学の核心をなす議論について、明快かつ精密な解釈を提示したことの意義はきわめて大きい。

以上により、審査委員会は、本論文が博士(文学)の学位を授与するに値するものと判断する。